

第2回



～形から受ける印象と造形～

美術教育監修・執筆

上野行一

私たちの身のまわりはおびただしい数の物であふれている。ふだん何気なく見ている物を深く見つめ、物を形としてとらえることは美術の表現に欠かせない。今回は形から受ける印象と造形という視点から、丸、三角、四角という三つの形を手掛かりにして、形から受ける印象の違い、形のとらえ方、形の組み合わせで表現する手法を学ぶ。

学習前  
チェック!

- 形が与える印象について考えてみよう。
- ふだんはどのように物を見ているのだろう。
- 見慣れている物を新たな視点からとらえ直してみよう。

## 形から受ける印象

道路標識に丸や三角や四角など、さまざまな形があるのはなぜだろう。これは形から受ける印象の違いを、標識の目的に応じて使い分けしているからだ。逆三角形からは不安定な印象を受ける。そのため注意を促す重要な標識には逆三角形が用いられている。「止まれ」や「一時停止」の標識に逆三角形が使われているのは、歩行者保護の立場から他の標識と区別するためだ。

このように形のもつ特性を活用することは、デザインを考えるときの大切な要素だ。丸や三角や四角を活用したデザインを、身のまわりから見つけ出してみよう。

## 形のとらえ方

絵を描くということは世界を形でとらえることだ。昔から人々は三次元の世界を平面に絵として表すために、さまざまな努力や工夫を重ねてきた。

画家のポール・セザンヌ（1839～1906）もその一人。セザンヌは画家エミール・ベルナールに宛てた手紙の中で、自然を球体と円錐と円柱によってとらえることが大切だと説いている。

セザンヌは身のまわりの自然や物を幾何学的な形態としてとらえたが、それはひとつの固定した視点から眺めたのではなかった。いろいろな視点から見た形がひとつの画面に共存している。また、物を幾何学的な形態として簡略化してとらえる手法は、若い画家たちに影響を与え、形そのものを解体する表現へとつながっていく。

形のとらえ方にきまりはない。対象をしっかりと見つめよう。すると日常では気づかなかった対象の表情が新鮮に感じられてくるだろう。見る角度によってさまざまに変化する形と色彩。そのおもしろさや感じ取った美しさを表してみよう。



## 形の組み合わせで表現する

20世紀初頭に設立されたドイツのデザイン学校バウハウス。バウハウスの考え方は現代のアートやデザイン、建築に多大な影響を与えた。機能的でシンプルなバウハウスのデザインは、その造形原理に丸、三角、四角の基本図形を重視していたことが知られている。

2015年に仲條正義賞を受賞した長谷川朗もバウハウスのように丸、三角、四角を基本にしたイラストを制作している。基本図形の組み合わせで表現実習することは、画面構成の学習にもなる。